



百名塔巡礼

文・写真

福田弘明

百名塔巡礼

目次

まえがき	・・・・・・・・・・	5
・ 仏塔の起源と伝播		
・ 経典に表された塔		
・ 日本の木造仏塔のかたち		
・ 塔のプロポーション		
第一章 東北地方の塔	・・・・・・・・・・	9
・ 第01番 金剛山最勝院	・ 第02番 日吉八幡神社	
・ 第03番 海岸山普門寺	・ 第04番 羽黒山	
・ 第05番 雷雲山法用寺		
・ 宮大工の知識—I 寺院の建築様式		
第二章 関東地方の塔	・・・・・・・・・・	15
・ 第06番 日光東照宮	・ 第07番 独鈷山西明寺	
・ 第08番 施無畏山小山寺	・ 第09番 五徳山水澤寺	
・ 第10番 金鑽神社	・ 第11番 正中山法華経寺	
・ 第12番 成田山新勝寺	・ 第13番 長安山石堂寺	
・ 第14番 旧東叡山寛永寺	・ 第15番 長栄山本門寺	
・ 宮大工の知識-II 仏堂の間と面		
第三章 甲信越地方の塔	・・・・・・・・・・	26
・ 第16番 如意山乙宝寺	・ 第17番 蓮華王山妙宣寺	
・ 第18番 信濃国分寺	・ 第19番 一乗山大法寺	
・ 第20番 崇福山安楽寺	・ 第21番 独鈷山前山寺	
・ 第22番 新海三社神社		
・ 宮大工の知識-III 五重塔の各部名称		
第四章 駿河・東海地方の塔	・・・・・・・・・・	34
・ 第23番 多宝富士大日蓮華山大石寺	・ 第24番 医王山油山寺	
・ 第25番 小松原山東観音寺	・ 第26番 龍雲山三明寺	
・ 第27番 成道山大樹寺	・ 第28番 八事山興正寺	

- ・第29番 医王山密蔵院
- ・第30番 鳳凰山甚目寺
- ・第31番 大塚山性海寺
- ・宮大工の知識—IV多宝塔の各部名称

第五章 北陸・岐阜地方の塔 44

- ・第32番 金栄山妙成寺
- ・第33番 自生山那谷寺
- ・第34番 桐山明通寺
- ・第35番 大日山日龍峯寺
- ・第36番 吉田山新長谷寺
- ・第37番 両界山横蔵寺
- ・第38番 日吉神社
- ・宮大工の知識—V三重塔の各部名称

第六章 近江地方の塔 52

- ・第39番 龍応山西明寺
- ・第40番 阿星山常楽寺
- ・第41番 姨綺耶山長命寺
- ・第42番 長等山園城寺
- ・第43番 石光山石山寺
- ・宮大工の知識—VI基壇と礎石

第七章 京都地方の塔 58

- ・第44番 教王護国寺
- ・第45番 深雪山醍醐寺
- ・第46番 補陀洛山海住山寺
- ・第47番 靈応山法観寺
- ・第48番 大内山仁和寺
- ・第49番 小田原山浄瑠璃寺
- ・第50・51番 音羽山清水寺 (三重塔・子安塔)
- ・第52番 天王山宝積寺
- ・第53番 深草山宝塔寺
- ・第54番 雲晴山大福光寺
- ・宮大工の知識—VII軸部

第八章 奈良地方の塔 69

- ・第55番 法隆寺
- ・第56番 六一山室生寺
- ・第57・58番 興福寺 (五重塔・三重塔)
- ・第59番 談山神社
- ・第60番 法起寺
- ・第61・62番 二上山當麻寺 (東塔・西塔)
- ・第63番 薬師寺
- ・第64番 清水山吉田寺
- ・第65番 靈禅山久米寺
- ・宮大工の知識—VIII組物

第九章 大阪・和歌山県地方の塔 81

- ・第66番 勝鬘院
- ・第67番 天野山金剛寺
- ・第68番 鉢峯山法道寺
- ・第69番 牛滝山大威徳寺
- ・第70番 大悲山慈眼院
- ・第71番 一乗山根来寺
- ・第72番 金剛三昧院
- ・第73番 紀三井山金剛宝寺
- ・第74番 慶徳山長保寺
- ・宮大工の知識一区軒まわり

第十章 兵庫地方の塔 91

- ・第75番 岩嶺山石峯寺
- ・第76番 六条八幡神社
- ・第77番 比金山如意寺
- ・第78番 名草神社
- ・第79番 徳光院
- ・第80番 法華山一乗寺
- ・第81番 いかるが斑鳩寺
- ・第82番 泉生山酒見寺
- ・宮大工の知識一X屋根と妻飾り

第十一章 中国地方の塔 100

- ・第83番 日照山国分寺
- ・第84番 井山宝福寺
- ・第85番 真木山長福寺
- ・第86番 岩間山本山寺
- ・第87番 大滝山福生寺
- ・第88番 御滝山真光寺
- ・第89番 中道山明王院
- ・第90番 巖島神社
- ・第91番 海潮山向上寺
- ・第93番 転法輪山浄土寺
- ・第94番 保寧山瑠璃光寺
- ・第95番 瑞光山清水寺
- ・宮大工の知識一XI柱間装置

第十二章 四国・九州地方の塔 114

- ・第96番 熊野山石手寺
- ・第97番 得度山切幡寺
- ・第98番 霊鷲山鶴林寺
- ・第99番 本吉山清水寺
- ・第100番 紫雲山龍原寺
- ・宮大工の知識一XII「左 甚五郎」考

あとがき 121

まえがき

仏塔の起源と伝播

仏塔は、元々インドの土塔で、Stupa から始まったとされている。Stupa は、ブッダの舎利を埋め、円形基壇の上に半球型の覆鉢（フバチ）という土盛りをして、焼き煉瓦や切り石で覆う。周囲には、欄楯（ランジュン）という玉垣を巡らせる。頂部には、平頭（ヘイトウ）という方形の囲いをして、中心に傘蓋（サンガイ）を立てる。紀元前 5 世紀頃に、ブッダが亡くなった時、最後に説法を受けたアマル人が、火葬にふし、そして舎利は集会堂に祀られた。しかしそれは、ブッダゆかりの国から、武力に訴えてもという引き渡し要求がでることになった。それで、ドローナというバラモンが仲介に入って、八つに分けて、各国はそれぞれ Stupa を造った。配分後にドローナと火葬にふした里人も灰を集めて Stupa を立てたので、十塔が立てられた。

その後、インドを史上初めて統一したアショカ王（紀元前 268 年～232 年）は、暴虐王と呼ばれていたが、カリంగా王国を征服したときの悲惨な状況を見て、深く後悔し仏教に帰依した。そして釈迦の始めの十基の Stupa を切り開き、舎利を分割してインド中に8万基以上の Stupa を立てさせた。この事業の一環で、出来上がったのが有名な Sanchi の Stupa である。

そして釈迦入滅後 500 年、紀元前 1 世紀頃仏教は西方のガンダーラ・現在のパキスタンのペシャワールに伝わり、ここで大乘仏教が生まれ、大衆化していった。その結果、ガンダーラ地方では、石造もしくは磚造（レンガ）の方形平面型の高層建築に Stupa を載せた形の精舎、下部には仏像を祀るものが、数多く建てられた。

これが 2 世紀に中国へ伝えられ、中国の神仙思想に基づく台と結びつき、承露盤（シウロパン）を Stupa に代えて樓閣形式の仏教寺院が形成された。中国では、仏塔は高層ではあるが本堂であり、最初木塔であったが火災を避けるため磚塔になった。現存する唯一の木造仏塔は、1056 年に造られた山西省応県の仏宮寺釈迦塔である。八角形で対辺距離 30.3m、高さ 62.9m である。階段があり、登ることができる。そして朝鮮半島に中国から仏教が伝わった時に仏塔に大きな変化が起きた。中国では樓閣形式の建築物だったのに、朝鮮では 1 層目のみに仏像が配置され、上層は登ることができないようになり、仏塔自体は仰ぎ見るシンボルとなった。李王朝時代のもので現在も韓国に残る木造仏塔は、法住寺捌相殿五重塔である。相輪部を含めた高さが、22.5m である。日本と同様上層へは登れず樓閣形式ではない。しかし、軸組み構造は日本とはまるで違うものである。

塔の語源もサンスクリット語の Stupa に起因する。Stupa が中国語で「卒都婆」あるいは「卒塔婆」の文字に訳され、さらに「塔婆」になり「塔」と称されるようになったといわれている。

経典に表された塔

「法華経」の「方便品(ホウベンポ)」に、「入滅した仏たちの遺骨に供物をささげ、宝玉づくりの幾千の塔や、金・銀および水晶の塔を建立した人々、緑玉の塔を、猫目石・真珠づくりの塔を、また極上の瑠璃あるいは沈香の塔ならびに青玉の塔を誰かが建立するとき、かれらはすべてくさとりに到達するであろう。また他の誰かが大理石・楠檀あるいは沈香の塔を建立するとき、又他の誰かが天木樹の塔や種々の木材を組み合わせて塔を建立するとき、心から歓喜して仏たちのために、煉瓦造りの塔や粘土を積み重ねて塔をつくる時、そのために森や荒れ野に土塁を築かせる人々も、子供たちが遊戯の際に、そこそこに、小石づくりの塚を作り、仏たちのために供養塔とするときも、これらの人々は、すべてくさとりに到達するであろう。」このことは、それぞれの能力に応じて塔をつくることで、さとりに到達することができるといっているのである。「法華経」では、塔をつくることは仏像を刻むことと並んで、さとりに至るための重要な手段として位置づけられている。

さらに、「法華経」の「見宝塔品(ケンボウタウホ)」には、仏様が法華経を説法されると、信仰する人々の目前で、大地から高さ五百由旬(ゴヒョウジュン)、縦と横が二百五十由旬もある立派な塔が湧きあがり、空中に止まりました。仏様は出現の理由を尋ねられ「多宝如来が過去世の請願にもとづき、法華経説法の場に現れ、真実の証明をされたのである。」と説明された。宝塔の扉が開かれると、仏様は宝塔に入り多宝仏と並んで座られた。宝塔の中で仏様は、大きな声で三度、入滅後に法華経を広めることを勧められた。

さとりの境地に到達した如来が、「法華経」の教えを得て、完全なさとりに到達し、その入滅の折に、次のように告げたといわれている。

「わたしが入滅したときに、如来の全身のために一つの大宝塔を建立すべきである。また他の塔もわたしのために建立されるべきである。」

この教えでは、塔は「法華経」の思想そのものの象徴であるとされている。

注記：由旬とは、牛車の一日に進む距離で約7kmである。

日本の木造仏塔のかたち

日本の木造塔を大きく分類すれば、飛鳥時代に中国・朝鮮半島を経て伝来した多重塔と平安時代に日本で創建された多宝塔とに分類できる。

このうち一般に塔といわれるものは多重塔で、一つの塔全体の構成は、相輪（ワリ）・塔身・基壇の三つの部位に分けられる。相輪とは塔の最上部に上げられた金属製の尖塔である。下から露盤（ロバン）・覆鉢・請花（ウハナ）・九輪・水煙（スイエン）・龍舎・宝珠の部分からなります。この相輪は、塔の飾りのように見られがちですが、Stupa を象徴している。塔本体をなす木造多層の建物が塔身で、建物の基礎部分が基壇と呼ばれ、基壇上に塔身が建てられる。

多重塔には二つの形式があります。一つは、各重とも軸部を明確に造る層塔（ワウ）ともう一つは、二重以上を軒・屋根だけを積み重ねたような檐塔（イトウ）とがある。日本で建てられた多重塔は、ほとんどが層塔形式で、檐塔形式は数えるほどしか建立されておらず、現存するものは桜井市にある談山神社十三重の塔の唯一基である。層塔形式は、三重・五重・七重・九重と建立されましたが、現存するものは、三重・五重だけである。文献・礎石の発掘等から建立の確認されている七重塔は、東大寺東西両塔をはじめ各国国分寺で建てられ、同じく九重塔は、百濟寺や法勝寺に建立されている。

層塔には裳階（モウ）を設けたものがあり、法隆寺五重塔・海住山寺五重塔・別所温泉にある安楽寺三重塔では初重に、薬師寺東塔（三重塔）では各重に設けている。裳階は、一見したところ重が増えたように感じるが、重には入れないのである。多重塔の平面形状は、四角形がほとんどで、多角形平面はいくつか建立されただけで、現在残っているのは別所温泉にある安楽寺三重塔の八角形平面が唯一である。

日本で建てられた塔の形式としては、多重塔のほかに多宝塔がある。平安時代に日本で考えられた形式で、平面が下重四角形・上重円形で軒は上重・下重とも四角形の二重塔をいいます。真言宗を伝えた空海が高野山に建てたものが最初とされ、釈迦・多宝の二仏を安置している。これが後に大塔あるいは多宝塔と呼ばれ、それを小型化し、簡素化して普及したのが現在残っている多宝塔である。外観は二重塔となり、相輪を上げるところは多重塔と同様ですが、水煙・龍舎はなく、四葉・六葉・八葉の請花を重ね、宝珠に火炎をつける等、若干の違いがある。多宝塔の変形として、上重が四角形の二重塔が徳島県の切幡寺に、また平面形状が上下重ともに六角形の二重塔が伊香保温泉の水沢寺にある。

塔のプロポーション

多層塔においては、上重の遞減(行ぐ)の割合、総高さとの相輪長さの関係、塔身高さと柱間長さの比例等が、意匠に大きな影響を与え、その数値の違いによって、塔から受ける印象が変わってくるものである。さらに建物にリズム感やら軽快感を与えるものに、軒反り(ノギリ)がある。まずは各種寸法の関係と意匠について以下に考察する。

まず柱間寸法の遞減、すなわち初重柱間を1としたときの最上重の柱間はいくらになるかを数値的に示したものを1から減じた数値を遞減率と呼んでいる。この数値は現存の五重塔で0.5程度から0.3程度、三重塔で0.5程度から0.2程度の範囲で変化している。この数値は塔の安定感を示しているといつてよいと思われる。高さとの関係はあるが、数値が大きいほど四角錐に近く安定感を増し、落ち着いてどっしりした感じで、小さいほど角柱に近く安定感に乏しくなるか、寸胴になり見かけが悪くなる。

次に総高さにおける塔身部と相輪長さの占める割合を見ると、総高さを1としたときの塔身部の比率は、五重塔でほぼ0.65からほぼ0.75で、三重塔ではほぼ0.65からほぼ0.7です。この数値は、塔の均整の良さを示す指標になる。五重塔では、相輪と塔身の比率が1:2のとき一番バランスが良いように思われますが、相輪と塔身の比率が1:3になるとバランスが悪くなる傾向にあると思われる。

最後に縦と横、すなわち塔身の高さと柱間寸法関係については、細長さを表す指標として使われます。柱間寸法を1とした場合、塔身の高さの数値は、五重塔でだいたい3.5からだいたい5強、三重塔でだいたい2.5からだいたい4まで変化する。数値5強に近い五重塔は、やはり細長すぎて、心もとない感じがします。

多宝塔においては、下重柱間と上重直径の比率と総高さとの各軒高の関係が意匠に大きな影響を与える。平面関係では、下重柱間を1としたとき上重直径がほぼ0.4からほぼ0.6となり、0.5が平均値となっている。0.5より小さいと細くて繊細な感じがする。高さ関係は、総高さを1とすると塔身高がほぼ0.65からほぼ0.7で、下重軒高がほぼ0.2からほぼ0.3で、平均値は0.25です。さらに上重軒高は、ほぼ0.5弱からほぼ0.55で、平均値は0.5です。言い換えれば、総高さの2/3が塔身高、1/2が上重軒高、1/4が下重高となるのが平均値で、その通りの比例になっているのが、尾張の密蔵院の多宝塔である。